

あきたこまちRとは

- 「あきたこまち(母)」に、カドミウム低吸収品種「コシヒカリ環1号(父)」を交配した後、「あきたこまち」を7回戻し交配してできた品種(交配育種)です。
- 収量、品質、食味等の特性は「あきたこまち」と同等で、カドミウムをほとんど吸収しないという特性を持っています。
- 「あきたこまちR」に切り替わっても、これまでの「あきたこまち」と栽培管理は同じです。

あきたこまちRに切替する理由は

- 海外の基準値に合わせて、国内基準値が厳しくなっても対応できるようにするためです。
→米産県として将来を見据え、国内外の消費者に安全なコメを供給していくことが重要です。
- 海外ではカドミウムやヒ素の基準は日本より厳しい
 【カドミウム】日本 0.4ppm → 香港・シンガポール 0.2ppm、EU 0.15ppm
 【無機ヒ素】日本 未設定 → 香港・シンガポール・コーデックス委員会 0.35ppm
- 輸出拡大
にも対応
が必要
- 「カドミウム」と「ヒ素」の両方を低減するためです。
→カドミウムとヒ素の水管理の対策は全く逆になります。カドミウム低吸収の「あきたこまちR」に切り替えると、湛水管理が不要となり、両方を低減することが可能となります。

米袋の表示

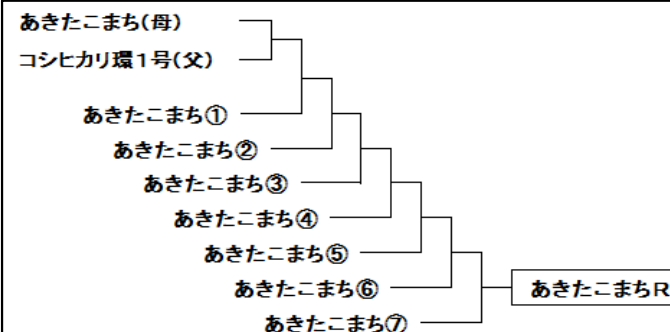
- 「あきたこまちR」は、「あきたこまち」と形質や品質の評価に差がないので、品種群として1つの銘柄となり、米袋の銘柄は「あきたこまち」、品種名は「あきたこまちR」となります。

美の国あきたネットの【[水稻新品種「あきたこまちR」](https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/73119)を紹介します！]
 (https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/73119) をご覧ください。

【QRコードはこちら】

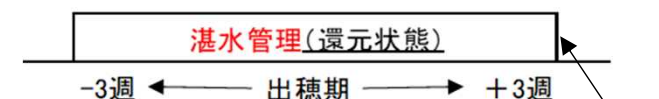


あきたこまちRの育成系譜

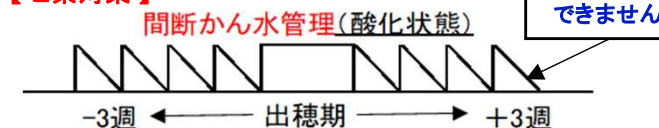


カドミウムとヒ素の吸収を抑制する水管理の違い

【カドミウム対策】



【ヒ素対策】



米袋の表示

検査証明書		
令和7年産	水稻うるち玄米	荷造り、包装及び左記の事項を証明する。
銘柄	秋田県産 あきたこまち	
正味重量規格 30kg	等級	

検査請求者記載欄

検査請求者	秋田 太郎
住所	秋田県秋田市山王四丁目〇番〇号
生産地	秋田県秋田市
品種名	(あきたこまちR)

「あきたこまちR」の特性は「あきたこまち」と同等です

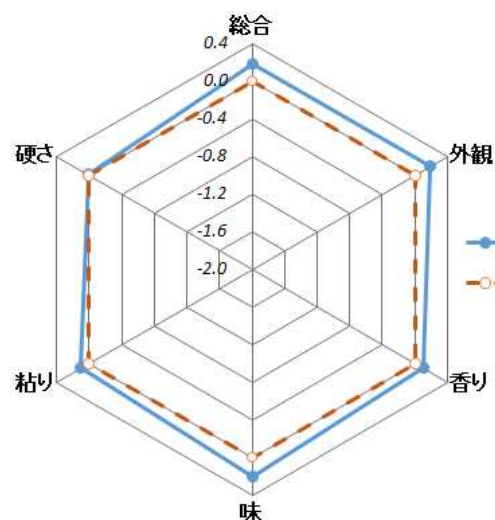
(農業試験場、2019～2021年平均)

品種名	あきたこまちR	あきたこまち
早晩性	早生	早生
草型	偏穂数型	偏穂数型
耐病性		
いもち耐病性		
遺伝子型	<i>Pia</i> 、 <i>Pij</i>	<i>Pia</i> 、 <i>Pij</i>
葉いもち	中	中
穂いもち	やや弱	やや弱
白葉枯耐病性	やや弱	やや弱
耐倒伏性	やや弱	やや弱
耐冷性(障害型)	中	中
穂発芽性	やや難	やや難
高温登熟性	中	中
出穂期(月日)	7.27	7.27
成熟期(月日)	9.05	9.06
稈長(cm)	76.8	77.1
穂長(cm)	17.3	17.6
穂数(本/㎡)	439	433
収量(kg/a)	57.3(98)	58.8(100)
千粒重(g)	22.6	22.8
品質(1～9)	1.8	2.0

※砂質で秋落ちが認められるほ場では「ごま葉枯病」に注意が必要です。

※品質は、1(1等上)～9(3等下)の9段階評価です。

「あきたこまちR」の食味は「あきたこまち」と同等です



(2019～2020年産米の平均値比較)

- 1) 奨励品種決定試験ほ場産を用いて、外部機関で食味試験を実施。
- 2) 基準品種は同一ほ場で栽培した「あきたこまち」を用いた。
- 3) 両品種の食味は、統計上有意な差はありません。

「あきたこまちR」の質問にお答えします

質問① 放射線育種による米ですか

○ 「あきたこまちR」は、放射線を照射して育成した米ではありません。「交配育種」による米です。

※ 「コシヒカリ環1号」は、コシヒカリの種子に1度だけ放射線を照射して突然変異を誘発し、カドミウム低吸収性を持つ株を6世代以上栽培して、選抜を繰り返し育成された品種です。

※ 放射線育種は、50年以上も前から多くの農作物の品種改良に用いられ、自然界でも起きる突然変異を利用した一般的な育種法です。

※ 具体的には、水稻では耐冷性の「レイメイ」、耐倒伏性の「北陸100号」等の開発をきっかけに、「アキヒカリ」、「キヌヒカリ」などの後代品種が多数育成され、現在、国内で生産される多くの水稻品種が、放射線育種由来となっています。さらに、大豆や野菜、果樹等でも様々な品種が育成され、一般的に流通し食べられています。

※ もちろん、安全性に問題はなく、有機栽培としても認められます。

質問② なぜ、全県的に「あきたこまち」から「あきたこまちR」に切り替えるのですか

○ 海外ではより厳しいカドミウム基準値を設定している国が多く、今後世界基準に合わせて国内基準値が厳しくなることが見込まれ、そうすると、県内の一部だけの問題ではなくなります。

○ また、ヒ素の基準値を設定している国が多く、国内基準値が新たに設定されることが考えられますが、その対策は、カドミウムと全く逆の水管理が求められることになります。

○ したがって、海外への販路拡大とともに、将来を見据え、より厳しい基準になっても「米どころ秋田」で安全な米生産ができるように全県的に切り替えることが重要です。

質問③ 栽培方法はこれまでと同じでいいですか

○ 出穂期や成熟期、収量性や品質等は「あきたこまち」と同等で、カドミウム吸収抑制対策が必要な地域で出穂期前後の湛水管理が不要となる以外は、基本的にこれまでと同じ栽培方法で問題ありません。

○ ただし、生育に問題はないものの、マンガンの吸収能力が低下していることから、砂質で秋落ちが認められるほ場ではごま葉枯病の発生に注意が必要です、田植え時に使用する育苗箱施用剤をごま葉枯病に登録のある剤に変更したり、過去や当年の発生状況に応じて本田防除を行えば問題ありません。

○ 引き続き、稲づくりの基本である「土づくり」に努めることが重要です。

「あきたこまちR」生産・販売推進本部

問い合わせ先：秋田県農林水産部水田総合利用課 (TEL：018-860-1785) 秋田県農業試験場 (TEL：018-881-3312)